



教皇様の叡

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1995 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

かけがえのない女性の役割

教皇庁家庭評議会にお集まりの皆さんにごあいさつ申し上げます。今回は第十一回目の総会となるわけですが、国際家族年を機に、教会は社会と個人の生活の土台となる人間的あり方について、霊的、道徳的な面から考えるよう信者に呼びかけます。(…)

「二千年を目前にした、家庭と社会における妻であり母である女性」が今回のテーマです。社会の中核、また専門職における女性の重要な役割を忘れることなく、皆さんが提議されたのは、女性の使命の持つ二つの基本的で互いに補い合う局面、「妻として、母としての役割」についての考察です。この点に関して、使徒書簡「女性の尊厳と使命」に言及してくださいましたが、その中で私は、女性に敬意を表し、教会と社会における女性の尊厳と使命を

強化することの大切さを述べています。妻として、母としての女性の役割を大切にすることは、女性を家庭の中心に位置づけることです。女性の個性を深く特徴づけるかけがえのない役割は、称賛され、認められ、他人が代わることでできない役割として考えられなければならない。女性に特別な敬意を込めて守ります。教皇パウロ六世

の言葉を思い出してみてください。「他どの宗教よりもキリスト教では、女性は初めから尊厳ある特別な地位を有し、それが新約聖書の中で余す所なく示されている。」(イタリア女性協会全国大会の参加者へのお話、一九七六年十二月六日) 私も次のように強調したいと思えます。「神は男と女に人類を創造されて、男女に等しい人格的な尊厳を与えた。」(使徒的勧告「家庭」22番) 「男女は同等な人間で、両方とも神にかたどって創造されました。」(「女性の尊厳と使命」6番) しかし、母性に対する敬意を損なうような批判的な声があることも事実です。あからさまな反対ではないにせよ、産業社会における生産性や利潤への損害であるという批判もあります。しかし、女性が家の外で働けば、子供の世話や育児の面で家庭生活に問題が生じることが否定できません。特に子供たちが小さいときにはなおさらです。私は今年の聖ヨセフの祝日に、次のように述べました。「家庭の中心にある女性の、母親の仕

事に注目しましょう。…共通善や社会的、経済的な面において能力を発揮したいというもつともな望みはしばしば女性を専門活動に従事させます。しかし、家庭や人類は損失をこうむる危険を避けなければなりません。女性が子供を生み育てることは、他人が代わることでできない役割だからです。女性の地位を向上させると同時に、適切な法律によって母親、教育者としての女性の使命を保護しなければなりません。」(イタリア造幣局職員を前にしてのお話) 家庭の中の女性の仕事に相応の尊敬を払い、否定できないその社会的価値を認めるべきです。「その仕事は最大限に認められ、評価される必要があります。」(「家庭への手紙」17番) 教会の社会教説が勧めるように、この要求に十分に答えるためには、政治家や立法者や企業の指導者が適切な指導力を発揮することが必要です。回章「働くことについて」の中で、社会福利と共に家族給与について述べました。家族給与とは「他の配偶者が家庭の外で有給の仕事につかなくてもいように、家庭の長に対してその労働の報酬として支払われる、家庭の必要を満たす額の給料」であり、「女性の真の進歩は、女性に特有のものを捨てたり、母としてかけがえのない役割を持つ家庭を犠牲にしてまで、その進歩の代償を払う必要がないように、労働がしっかりと組み立てられるべきことと求めます。」(19番) 女性は神の賜として、母親としての荣誉と喜びにあずかる権利を持つていますし、子供たちも両親、特に母親の世話や心配りを受ける権利を持っています。だからこそ家庭に関する政策は、多くの家庭がその役割を果たす上で経済状況によって深刻に左右され、制限されている実情を考慮に入れて実施されなければなりません。使徒的勧告「家庭」の中で説明したように、「家庭の善は市民共同体に欠くことのできない本質的な価値であるという確信に立って、公的機関は、家庭が人間的なあり方で自分の責任を担うために必要な全ての援助(経済的、社会的、教育的、政治的、文化的援助)を保障するよう可能なかぎり力を尽くさなければなりません。」(45番) 皆さんの選ばれたテーマには大切な司牧的意味が含まれていますが、この会議に先立って開かれた家庭に関する会議の宣言が示すとおり、女性、妻、母の地位の向上と保護、「愛の文明の中心」(家庭への手紙、13番)である家庭の価値刷新と発展のために貢献できますように。(…)

十字架との約束の時

「私たちはイエズスにお目にかかりたいのです。」

(ヨハネ12・21)

兄弟姉妹の皆さん。これは過越の祭りのためエルサレムにやって来たギリシア人たちが、使徒フィリッポに言った言葉ですが、とても興味をそそられます。

イエズスが最後に訪れた聖なる都にはさまざまな人がいました。素朴で貧しい人々は歓呼の声を上げてイエズスを迎え、イスラエルの王・主の名によって遣わされた者であると認めました。ファリサイ人とユダヤの有力者たちは彼を恐れ、自分たちの思惑を妨げる危険人物であると考えて、彼を排除することに決めました。また異邦人、正確にはギリシア人たちが、友人ラザロを蘇らせたばかりで皆が驚き、熱狂していたので、イエズスに会ってその人となりやわざについてもっと知りたいと望んでいました。

「イエズスにお目にかかりたいのです。」この言葉には、福音史家の伝えるエピソード以上のものがあります。実際、彼らが示したのは何世紀にも渡り続いていった願いや問いかけでした。それは、キリストのことを話には聞いたものの、会ったことがない多くの人々の心からあふれ出る願いでも

あります。

イエズスはこの機会をとらえてご自分がメシアであることを明かし、信じる人に生命を与える贖い主の「秘義」にあずかる道を示し、自らのメッセージと救いのわざを明らかにされました。

イエズスの答えには、彼が心待ちにしていた瞬間、まさに起こりつつあった時への言及が見られます。それはイエズスの存在と救いの歴史全体の終着点を示すもの、すなわち十字架の時でした。

それは審判の時、悪の王サタンが倒され、限らない神の愛が最後の勝利をおさめる時です。地上から上げられ、十字架にかかったキリストは、自ら進んで死を迎えましたが、御父はキリストを復活にまで高め、全てを彼から引き出し、こうして全ての人が神と、またお互い同士の和解のできるようはからわれました。

それはキリストの過越のいけにえの時、苦しみと死の瞬間としてのみならず、何よりもその深い内奥において従順の行為・御父に栄光を帰する行為として、またキリストを信じる人々のための贖いの源として、受け入れられたものでした。なお、それは預言者たち(特にエレミア)が告げた新しい

永遠の契約の成就の時でした。旧約時代のような石板ではなく、キリストの血で聖別され、聖霊の賜によって封印された契約です。キリストの刺し貫かれたわき腹から信者の心に注ぎ込まれる賜は、信者をキリストに一致させ、その愛の使者・証人に変えてくれることでしょう。

イエズスは、言葉だけでなく素朴で意味深い姿を取って、万人の救い主であるご自分をお示しになります。信じて従い、弟子になる人々のため生命をお与えに

えになるということです。地に落ちた麦粒が死んで実を結ぶように。ある教父は次のように説明しています。「麦の粒は主・救い主の御体として私たちに示されたものです。地に埋められて多くの実を結んだのは、復活が美徳の実りをもたらし、全地に信仰を芽生えさせたからです。」(クロマツイウス「説教」30・2) 麦粒のたとえはキリストの過越の秘義のもう一つの局面を示してくれます。キリストを主役とする出来事は、多

霊的活力のみなもと

断食をもう一度みなおす

(…) かつてキリストは使徒たちに、悪の力に打ち勝ち、悪魔を追い出すには祈りと断食による他ないと仰せになりました。

特に私のような六〇歳を過ぎた者なら、教会における断食の問題が細部に渡り特別の教会規定で定められ、実行にあたっては多くの規則があったことを知っています。断食については決疑論や倫理神学上の問題も多くありました。

状況が変わったせいでしょう、これらのことは今ではずいぶんましになっています。戦争があり、時局も困難になり、あまりに細かい教会規定で断食を定めるのはもはや無益ではないかと考えられるようになりました。それはその通

りでしょう。そして現在、断食の規定は年間2日にまで縮小されています。残り全ては個人の意志に任せられ、個々の信者の私的なことにとりなりました。たぶんこれがいいのでしょうか。こうするのが正しいことなのでしょう。しかし、私たちの生きていく時代の風潮は、断食とは全くあいいれないように思えます。

消費主義については常に言われています。物を使うことは断食の精神に反する。断食とは物を放棄すること、より高く霊的な動機のために物を使わずにすませることである。この世のことがらに埋もれるのではなく、霊的な人間として生きるということです。でもこ

くの実をもたらしませんでした。実際、その死と復活によって聖霊の力が到来し、新しい契約の民・全ての人に開かれた過越の共同体すなわち教会の源となる恩寵の生ける水が与えられたのです。

キリストの死は、朽ちてのち生命をもたらず麦のようです。その麦は、師と同じ道を歩み、同じわざを行い、神の普遍の救いの計画の協力者・奉仕者として召された弟子たちの生き方の模範となりました。(…)

(九一・三・十七)

れら全ては、今日のメンタリティとはかけ離れているのではないかと思います。正教会・東方教会の兄弟たちに比べ、私たちはどれほどこの点について強く確固たる態度を保っていると言えるのでしょうか。ラマダン(断食)を守るイスラム教徒のことはさておき、ユダヤ教の信仰が断食の精神に関して実に厳格であることは確かです。私たちは他の人々に遅れを取っているのではと思うことがありません。カトリックにはやる気がないと云うのではありません。主への忠誠と、なかならず私たちの努力がどれくらい効果をあげているのかという問題なのです。私たちは大いに努力しており、教会の組織自体にも力があるのは事実ですが、時には霊的な力、すなわち祈りと断食による力が不足しているのではないかと思います。現代の西側世界の住人が進んで他人に物

【購読者の皆様へ】

※兵庫県震災の影響で、3月号の発送が遅れる場合がございます。あしからずご了承くださいませ。お祈りいただければ幸いです。

説教・講話・書簡等の抄訳

を送るようになったこと、義援金などを出していることは事実です。多くの人がそうしており、数多くの企てもあります。人々は自分が何かを放棄するよりも、他人に物を与える方が好きなのです。

イエズスは断食によって
受難にそなえた

実に私たちは、この世の精神に直面しています。この世の精神に打ち勝つこと、キリストがお話しになった悪霊に打ち勝つことは、

司祭と個人的聖性

教会シリーズ 24

大きな課題です。これは容易ならぬ挑戦です。私たちは注意深く相手の力と自分の力を調べ、この霊的戦いへの挑戦に耐えられるかどうか確かめなければなりません。偉大な聖人たちが牧者たちが祈りと断食の力で自らを強めていたことはよく知られています。それ思い出して、断食の精神を教会やカトリック共同体、ローマ教会の生活の中に復活させるべきではないでしょうか。(…) (九四・二・十七)

たな方法で神に聖別された者となつたからであり、永遠の司祭キリストの生きた道具となり、天上からの力によって全人類社会を回復させたキリストのすばらしいわざを、時代を通して続けよう者となつたからである。(司祭の職務と生活に関する教令、12番)ピオ十一世も回章「カトリックの司祭に」(一九三五年: AAS 38(1936): 10参照)の中で同じことを勧めています。

司祭は特にキリストを
まねるべき

1 聖書に基づき、キリスト教の全ての伝統が司祭のことを「神の人」、つまり神に聖別された人と称しています。神の人という定義は全てのキリスト者に当てはまりますが、聖パウロはこの呼び名を特に弟子の司教ティモテオに対し、聖書の使用を勧める時に使っています。(IIティモテオ 3・16参照)それは神のため特別に聖別されたという理由により、司教と同じく司祭にも当てはまります。実際、人は洗礼によってすでに最初の基本的な聖別を受けており、罪からの解放と、存在論的にも心理的にも神に属する特別な状態に入っているのです。(聖ト

マス「神学大全」II-II, q. 81, a. 8参照)一九七一年のシノドスが、聖霊の塗油によって司祭が参与するキリストの司祭職に言及した時に思い起こさせたように、司祭の叙階はこの聖別された状態を確認し、深めるものです。(エンキリデオ・パチカヌム、IV, 1200、1201参照)

ここでシノドスは再び第二バチカン公会議の教えを取り上げ、洗礼の聖別の力によって完徳を目指すべき義務を司祭に思い起こさせた後、加えて「司祭は特別な理由によって、この完徳に到達するよう義務づけられている。司祭は叙階の秘跡を受けたことによって新

命、職務を与えるだけでなく、人間の新たな聖別を意味します。すなわち、その存在と行動においてキリストへの特別な帰属を意味する、消すことのできない霊的なしるしとして叙階の秘跡によって刻印された印章(霊印)に結ばれた人となるわけです。従って、司祭に要求される完全性は、贖い主キリストの司祭職に参与するにふさわしいものです。役務者は自身自身の内に、その感情と内的指向と意志、主な行為者(キリスト)に固有な兄弟たちに奉仕する心、父なる神へのいけにえを捧げる心を再現しなければなりません。

2 その結果、司祭は恩寵の言葉が熟練者となって、キリストに一致し、同時に兄弟姉妹への牧者としての奉仕ができるようになります。第二バチカン公会議によると、司祭は「それぞれの方法でキリスト自身の代理をする者であるから、特別な恩寵を受ける。この恩寵によって、司祭は託された人々と神の民全体とに対する奉仕を通して、自分が代理をするキリストの完徳をよりよく追求できるようになり、さらにこの恩恵によって、われわれのために「聖、潔白、清浄、罪人から区別された」(ヘブライ7・26)大司祭となつたキリストの聖性が、肉を持つ人間の弱さをなおすのである。」(司祭の職務と生活に関する教令12番、Pastores dabo vobis 20参照)これによって司祭は、大司祭キリストに特別に似た者となるよう義務づけられています。それは叙階の特別な恩寵の結果です。すなわち「司祭であり、いけにえであるキリストとの一致」の恩寵、また、この同じ一致の力により自分の兄弟姉妹たちのために良い牧者として奉仕する恩寵です。これについては、聖パウロの例を思い出すとよいでしょう。パウロはひたすら聖別された使徒として生きました。「イエズス・キリストによって捕えられた者」であり、キリストと一致して生きるために全てを捨てたのです。(フィリピ3・7、12参照)彼はキリストの生命で満たされているのを感じ、完全な誠実さで述べました。「私は生きていますが、もはや私ではなく、キリストが私のうちに生きたまうのである。」(ガラツィア2・20)しかし、「キリス

トにある一人の人」として受けた特別の恩寵について述べた後、彼は決して免れることのなかった試練、「肉体に与えられた一つの刺」に苦しみました。彼は三度主に祈りましたが、答えはこうでした。「あなたには私の恩寵で足りる。恩寵の力は弱さのうちに完成されるからである。」(IIコリント12・9)

この例に照らして、司祭は自身自身の人間としての限界を経験しながらも、キリストの霊に自身を沈め、キリストとの一致にとどまることにより、自身の聖別された命を完全に生きるよう努力すべきことがよりよく理解できるでしょう。これらは司祭の役務遂行の妨げではありません。なぜなら、司祭には「十分な恩寵」が与えられているからです。従って、司祭が信頼すべきもの、拠り所とすべきものはこの恩寵であり、こうして司祭は絶えず聖性が増していくよう希望しつつ、完徳に向かって努力することができるのです。

自己を捨てること不可欠

3 キリストの司祭職への参与は、必ず司祭に犠牲の心を呼び起こします。すなわち「十字架の重み」に象徴されるような、特に禁欲や犠牲という形で表わされるものです。第二バチカン公会議によれば、「父が聖化、すなわち聖別してこの世に派遣したキリストは、「私たちを罪から贖い、善業に熱心な民をご自身のために

「聖なるロザリオ」……ロザリオの祈りの深さを再発見するために……ホセマリア・エスクリバー著 定価一二三六円
「十字架の道行」……主のご受難は希望と勝利への道でもあった。黙想のしおり付き。ホセマリア・エスクリバー著 定価一二〇〇円

不変の教え

清めようとされて、私たちのためにご自分を与えられた。」(ティモテオ2・14) 同様に、聖霊の塗油によつて聖別され、キリストから派遣された司祭は、自分の中で肉のわざを殺し、人々の奉仕のために献身する。これがキリストから司祭に授けられる聖性であり、この聖性を通して司祭は完全な人間へと近づくのである。」

(司祭の役割と…、12番)

これが完徳への道の修徳的な面です。この世の良いものであつても内的進歩を阻むなら、司祭はそれらを望んだり執着したりしないよう戦い、自己を放棄しなければなりません。これが修徳の教師たちの言う「霊的戦い」であり、全

1・12〜21 教皇様はアジア・太平洋地域を歴訪された。

●1・14 フィリピンのマニラで第10回世界若者の日大会に出席、世界中から集まった若者たちと共に祈り、質疑応答を交される。

「他者のため自由に自らを与える度合いに従つて人生は意味を増してきます。…皆さんは自分自身と自分の時間、エネルギー、能力を他の人々の善のために捧げることができませんか。」

●1・15 世界若者の日の閉会ミサを司式された。「来たるべき二千年代は、世界中の若者たちの自覚にかかっています。」

●1・18 パプアニューギニアのポート・モレスビーで、病人たちに祝福を送られた。「主の苦しみに

てのキリスト信者に求められるものですが、特に十字架のわざにおいて「司祭でありホスチア」のイメージを自身の中に再現するべき全ての役務者に要求されています。

4 明らかに、人は常に「望ませ、行わせ、御旨のままにされる」(フィリッピ2・13) 方から生じる恩寵に答え、心を開く必要があります。しかしまた、節制と禁欲の手段を用いることも要求されます。さもなければ人は恩寵も通さぬ固い土のようになってしまふからです。修徳の伝統は、司祭にいくつかの聖化の手段を常に指示し命じてきたとも言えますが―してきました。特に、ふさわしい聖体祭儀、時間どおりに聖務

日課(教会の祈り)を唱えること(リゴリの聖アルフォンソが忠告しているように、「間違つた取り扱いはしないように」)、聖体訪問、毎日ロザリオを唱えること、毎日の黙想と定期的に赦しの秘跡を受けることです。これらの実行は今でも有効であり、不可欠なことです。特に赦しの秘跡は重要です。赦しの秘跡を注意深く受けるなら、司祭は自分もまた貧しく弱い人間、罪人の中の罪人、赦しを必要とする者であると認識することにより、自身の現実の姿を知ることとなり、こうして司祭は「ありのままの自分」を知り、神の憐れみに信頼して依り頼むよう導かれます。(「和解と悔悛」31

教皇様の動き

を共にすることは死に打ち勝つ道です。」オーストラリアのシドニー到着。「この国は世界各地からより良い生活、自由、正義、寛容を求める人々を受け入れてきた多様な文化の社会です。民族対立や人種偏見が激化する世界において、調和と連帯の理念を固く保つてください。」

●1・20 シドニーから空路11時間、スリランカ首都コロンボへ。「私はローマからの友人として参りました。全カトリック教会は、諸宗教間の対話と協力関係を心か

番「Pastor et dabo vobis」26番) 個人的な聖性は役務を助ける

さらに、常に心すべきこととして第二バチカン公会議は述べています。「司祭が聖性に達する本来の道はキリストの霊において自分の任務をまじめに怠ることなく実行することである。」(司祭の役務と生活についての教令、13番) この宣言は、司祭が他の人に教えることを自分自身でも行うよう促しています。聖体祭儀は司祭をキリストとの一致と信仰において強めてくれます。牧者としての役務全体は司祭の愛を高めます。「神の民の指導者であり司牧者である司祭は、「良い牧者」の愛をもつて自分の羊たちのために生命を捧げるよう、また、最大の犠牲をも覚悟するよう励まされています。」(同、13番) 司祭の理想は、祈りと役務、熟慮と行動を統合すること、キリストにおいて生活の一致に達することです。なぜなら、司祭は神の意志と託された羊の群れのために自分を与えることを絶えず求めているからです。(同、14番)

ら望んでいます。」「聖性こそは真の福音土着に不可欠の条件です。」

●2・1 恒例の一般謁見の席上、アジア・太平洋地域の司牧訪問を振り返り、「少数派ではあつても、この地域のキリスト教信者は社会全体を変える福音のパン種となつています。」

●1月17日、阪神大震災の報を受け、教皇様はすぐ日本の教皇庁大使を通じて電文を送られた。

「当局および教会関係者、被災した全ての人々に心からお悔み申し上げます。犠牲者とその家族、家を失い、負傷した人々のために全能の神の慰めと御助けを乞い願います。救援・復興に携わる人々の上に神の豊かな祝福がありますように。」

5 さらに、自らの人間的傾向を聖化すれば役務が効果的なものになると知ることが、司祭にとつて勇氣と喜びのもとです。事実、第二バチカン公会議が思い起こさせるように、「神の恩寵はふさわしくない役務者をも通して救いのわざを行うことができるが、一般法則によれば、聖霊の刺

激と導きとに従順で、キリストとの深い一致と聖なる生活のゆえに使徒聖パウロと共に、「私は生きているが、もう私ではなく、キリストが私の中に生きています」(ガラツィア2・20) と言うことができる役務者を通して、不思議なわざを現すことを神は望むのである。」(同、12番)

キリストの道具として奉仕するよう招かれていると自覚する時、司祭は「キリストの代理者」として有効な道具となるために、「キリストとの深い一致のうちに生きる」必要を感じます。だから司祭は、その力のみならず神の計画を完成するためのいけにえとしての立場にもあずかつている永遠の司祭キリストの「聖別された生活」(こころと聖徳)を自分自身の中に再現しようと努めます。つまり、司祭でありホスチアなのです。

6 公会議の勧告でこの話を終りましょう。「聖なる教会会議は、教会の内的刷新、全世界における福音の宣布、現代世界との対話という司牧的目的地を達するために、全ての司祭が教会の勧める適切な方法を用いて、常により高い聖性を目指し、日増しに神のため全体の奉仕に役立つよい道具となるよう、強く勧告する。」(司祭の役務と生活に関する教令、12番) これこそ、この世における神の国の始まりである教会を築き上げていくために、私たちのなし得る最大の貢献なのです。(九三・五・二六)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月十日発行。定価 一部八十円。送料実費。一年千九百円。送料七百円。干部以上の一括購入なら送料不要。

郵便振替 01130-8-72393